



20年後の未来という今を生きる私たち

杉浦 淳吉

毎年、この時期になると、国際シミュレーション&ゲーミング学会に参加し、その経験を「風」に書いてきました。2024年はニュージーランドのクライストチャーチ、2025年はドイツのシュツットガルトでした。今年2026年はスウェーデンのストックホルム、そして2027年は東京で開催です。私が組織委員長を務めていることもあり、今回の大会参加は東京大会の広報という意味でも大切な機会でした。

学会はストックホルム市郊外にあるスウェーデン王立工科大学のキャンパスで開催されました。市内を見て回る時間は取れませんでした。私にとって21年ぶりのストックホルムは特別な思いがありました。

前回訪れたのは2005年です。当時、私はドイツのボーフム大学に在外研究で滞在していました。環境文明21の加藤三郎さん、藤村コノエさんらが行っていたスウェーデンの企業における環境教育をはじめとする欧州調査に加えて頂いたのですが、今回改めて、当時の記録を読み返してみました。ストックホ

ルムでは、ホテル、鉄道会社、住宅会社などを訪ね、環境への配慮を、企業の経営や働き方、製品やサービスの設計にどのように組み込むかを調査する貴重な機会となりました。

特に印象的なのは、住宅会社で聞いた話です。現在の基準を満たすだけでなく、将来、規制や人々の暮らし方が変わっても使い続けられるよう、住宅を100年後まで見通して設計するという考え方でした。

100年後という時間は、ほとんど想像の外にある遠い未来のように感じられます。あれから21年が過ぎました。100年のうち、その5分の1を、私たちはすでに生きたことになります。未来はある日突然やって来るのではなく、1年ずつ現在へと変わっていくのだと、改めて感じています。

前後しますが、2003年1月、名古屋で循環型社会に関する参加型会議を行うため、市民参加の技法を学ぶ欧州調査に参加しました。環境文明21の加藤さん、藤村さんと海外で一緒にするのは、この時が初めてでした。デンマーク技術委員会やドイツのシュ

ツットガルト大学を訪ねました。

現在では「ミニパブリックス」と呼ばれる、市民が熟議する仕組みが知られるようになりました。当時の私たちは、そうした手法を学び、日本の社会でどう定着させるか、といったことを構想していました。2006年に名古屋で実施した「なごや循環型社会・しみん提案会議」は、実際に名古屋市の環境計画の策定に向け、専門家、ステークホルダー、市民が集まって議論を重ねました。

この会議では、市民が将来の循環型社会の姿を描き、そこから現在に立ち戻って、何をすべきかを考えました。およそ20年後の社会を想定し、望ましい未来から現在の行動を考える、いわゆるバックキャストिंगの発想です。

そこから20年が経過し、2026年になりました。私たちは未来へ向かって生きています。しかし同時に、現在とは、20年前の私たちが未来として思い描いていた時間でもあります。2006年の名古屋で未来として語られていた時間は、今や遠い先の話ではなく、私たちは、その20年後の中にいます。

当時想定した「20年後」という未来が、そのまま実現したわけではありません。震災があり、感染症の世界的流行があり、社会や技術も大きく変化しました。未来は計画どおりに到来するものではなく、予想もしなかった出来事を含みながら現在を形作っていきます。

2026年の現在から2006年を振り返ることは、当時の提案が実現したかどうかを確認することだけではありません。20年前の人々が、何を問題と考え、どのような社会を未来として描いたのか。その未来の中を生きる私たちが、それをもう一度受け止め直すことに意味があります。

私は、2006年の「しみん提案会議」をゲームで再現し、「ステークホルダーズ・循環型社会編」というゲーミング教材を作成・実践し

てきました。参加者は、それぞれ社会の利益や個人のリスクの優先順位について討論しながら、「20年後のなごや」を構想していきます。

今年も、このゲームを私が勤務する東京の大学で実施しました。授業では、東京や横浜、福岡など、異なる地域で育った学生たちが、自分たちの地域のごみ分別や循環型社会への取組を紹介し合いながら議論を進めました。2006年には名古屋という一つの地域の未来として議論されていた課題が、2026年には、それぞれの地域が歩んできた20年間を持ち寄り、比較しながら考えられるテーマになっていたのです。

名古屋での市民会議はその場で終わったものではありません。そこで語られた内容はゲームとなり、教材となり、別の場所へ運ばれ、異なる世代の参加者によって再び考えられています。参加する人は入れ替わり、地域も世代も広がり、問いの意味も少しずつ変わっていきます。

それでも、未来を考える営みは受け継がれています。

2026年8月初旬、私は名古屋にある中京大学大学院の集中講義で、この「ステークホルダーズ・循環型社会編」を実施する予定です。2006年に名古屋で未来として語られた社会を、20年後の今、名古屋で学ぶ大学院生はどのように受け止めるのでしょうか。20年前の未来を生きている自分たちの現実、どのように向き合うのでしょうか。

過去に未来を考えた人々がいたように、現在を生きる私たちもまた、その先の未来を考えます。そして20年後には、そのとき未来と呼ばれた時間を、別の人々が現在として生きているはずです。

未来を語ることは、まだ存在しない世界を想像することだけではありません。過去の人々が未来として託した現在を、私たちがどのように生きるのかを考えることでもあるのです。